

キェルケゴールの思想の特質

大屋 憲 一

或る人間の思想の主題が何であるかと云うことは、その人の思想の特質を限定づけるものがある。キェルケゴールは彼の日記の中で「私が生きて、死んでゆけるようなイデーを見出したい」と云っているが、彼の主題は「自己が如何にしてキリスト者となり得るか」と云うことであつた。然も、そのことは誰もが生れながらにして、キリスト者に属していると云う、キリスト教が、或る意味では、自明なる社会の中であつて、キリスト者に成ると云うことを問題にしたのであつた。

当時の彼の社会をみるに、デンマークは政治的、社会的にも混乱の時期であり、H・L・マルテンセンを中心としたキリスト教界では、ヘーゲルの思想が色濃くその影を落としていた。即ち、ヘーゲル主義とルター神学との綜合の試みである。然も、他方では、ロマンティックの思潮が、依然として強くみられる。

このような時代思潮の中であつて、キェルケゴールが憂えたことは、個別者が普遍（全体）の中に解消されることによつて、自己が見失われると云うことであつた。そのような謂はば、「矛盾は媒介される」（ヘーゲル）ような生き方の中には、真の意味での超越性はあり得ない。更に云えば「矛盾は媒介されない」（キェ

ルケゴール）と云う生死そのものの現実を超えた真実に逢うところに、彼の所謂「隠れ」（Verstecktheit）の現実性も知られ、真に個別者としての在り方が確立されると云うのが、キェルケゴールの重要な一視点である。

ここに、彼の所謂「隠れ」とは、私共の現実であり、かの自らが自らを縛する「縛された自由」（eine gefesselte Freiheit）に示されるが如き、我々の所謂「繫縛」を意味するものがある。そして、このような謂はば繫縛の現実より目を離さない」と云うところに、彼の所謂「実存」（Existenz）的生き方がある。

彼は次のように述べている「実存する者（der Existierende）には二つの道がある。一方は、自分が実存していると云う事実を忘れるために、一切のことを試み、その結果、自らを滑稽な（Königlich）存在と化する道である。他方は、自分が実存していると云う此の事実の上に、すべての注意と自覚とを集中するのである」と。彼が注目したのは、後者における超すに超されぬ自己そのものの現実であつた。然も、逆に云えば、このような現実そのものを看過するところに、ロマンティックやヘーゲリズムムに代表されるような前者の在り様が示唆されている。

以下、キェルケゴールの意のあるところを、シュライエルマッヘルとヘーゲルとを通して、簡単に述べてみたい。シュライエルマッヘルは、宗教の本質を宇宙の直観（Anschauung）と感情（Gefühl）に求めたのであるが、宇宙自身の表現と行ふと云う深き受動性の感情の中に、彼は一切を生ましめる神のはたらきを読みとつたのであつた。然も、この場合、有限なものは無限なもの表現として受け取られ、一輪の花に光る朝露に、清純な大宇宙の鼓動を聞く如き、有限なものに相即する無限なるものの感得に

こそ、彼は宗教の本質をみたのである。

他方、キェルケゴールの深い関心の対象となつたものは、H・L・マルテンセンにみ得るようなヘーゲルの思想であつた。ここにも「論理的体系はあり得る」と要約され得るヘーゲルの思想と「現存在の体系はあり得ない」とするキェルケゴールの思想との対立がある。「あれも・これも」と云う在り様に対する「れか・これか」と云う在り様との相剋がある。ヘーゲルにみられる弁証法的歩みに示されるような矛盾をその動因とする彼の所謂、絶対精神の自己展開（運動）では、歴史は論理的体系の必然の中にみられ、個別的なものは、何かの形で絶対精神の自己実現として、普遍的なものの運動に於ける一契機としての在り方を荷うものとなる。

以上、何れにせよ、キェルケゴールは、相矛盾するものが、その質の相異に拘らず、媒介され、綜合されることによつて、真の個別者（実存）の在り方が見失われると云う点を強く批判したのであつた。

「矛盾は媒介されない」と云うキェルケゴールの強調は、不安 (Angst) や絶望 (Verzweiflung) の事実にもみられるように、本質的普遍でもつては割り切れない個別的存在者の実相を示すものである。真理を開顕せんとすことが、そのまま、真理を作り出し (erfinden)、自ら真理を構成してゆく (Konstruieren) ような魔性の深さ、又、「死に至る病」(Krankheit Zum Tode) にみられるような、この病は死に至らないと云う、謂はば、繫縛を断ち切ろうとすればする程、一層、断ち難い精神の病、このような病が、真実に知らされるところに、真の自己の確立があると云うのが、キェルケゴールの一貫して強調してきたところである。

キェルケゴールの仮名著作の背後には、常に『建德的講話』があり、彼の「著作全体からみれば、すべての美的著作は、一つの詐術」であつて、「宗教的なものが決定的なものであり、美的なものは仮面である」と彼が述べているのは、究極するところ、真実の実存が知らされ、そのような実存にめざめさせられることこそ、生死にある者の大事な一点であることを指摘するものである。